

対人援助者の感情体験の社会的共有が精神的健康に与える影響における文脈的業績を踏まえた再分析

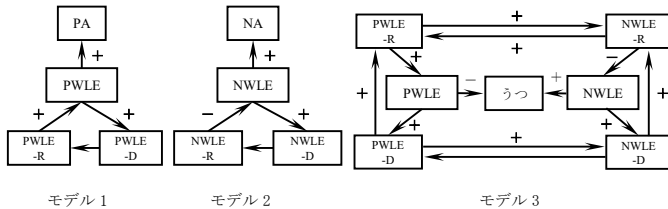
○森本寛訓 (川崎医療短期大学)・黒田裕子 (川崎医療短期大学)・
稲田正文 (川崎医療福祉大学)・長田久雄 (桜美林大学大学院老年学研究科)

キーワード：対人援助職者、感情体験の社会的共有、文脈的業績、マルチレベル構造方程式モデリング、多母集団分析

目的

筆者らは職場における対人援助職者のポジティブ、ネガティブ感情体験 (Positive, Negative Work Life Events: PWLE, NWLE) の社会的共有、すなわち PWLE, NWLE の開示 (PWLE, NWLE Disclosure: PWLE-D, NWLE-D) および応答 (Response to PWLE-D, NWLE-D: PWLE-R, NWLE-R) が、対人援助職者自身の精神的健康に与える影響について研究している (例えば森本・瀧川・黒田・稲田, 2016)。本発表ではこれまでの研究成果を、職場での中核的職務を円滑にするために職場組織を支援する自発的活動である文脈的業績 (Contextual Performance: CP) の程度を踏まえ改めて分析する。CPは「職場スタッフが仕事で成功したら褒める。」や「期限内に仕事を終わらせるために残業する。」といった行動で構成される。今回の発表では各対人援助職者の職場上司のCPを測定し、得られたデータを対人援助の職務に従事しやすい職場環境 (上司の態度および職場風土) の指標と見なして分析結果を検討する。

なお、PWLE, NWLE の社会的共有については以下の三つのモデルを設定している。



方法

調査時期と手続き 調査は 2015 年末に調査会社から調査内容を示した Web 画面が週 1 回ずつ 4 回配信され、その Web 画面から回答が得られた。調査内容については Web 画面の最初で調査対象者に説明し、調査参加への同意を得た。

調査対象者 調査会社のモニター会員から看護師等の有資格者が選ばれ、計 180 人を本調査の対象者とした。

調査内容 調査した内容を以下の 1, 2, 3, 4 に示す。
1. PWLE, NWLE, また PWLE-D, PWLE-R, NWLE-D, NWLE-R は、本調査のために作成された項目で測定した。(a) 初めに PWLE, NWLE の各項目について、調査日の前週にあたる 1 週間の体験頻度を 4 段階 (1: まったくなかった~4: しょっちゅうあった) で評定させた。(b) つぎに (a) で 2 以上の評定値を得た PWLE または NWLE 項目のうち、最も重要と判断された 1 項目に関する PWLE-D または NWLE-D の体験頻度を評定させた。評定期間と評定値は (a) と同じにした。(c) 最後に (b) で 2 以上の評定値を得た PWLE-D または NWLE-D 項目から、最も重要と判断された 1 項目について周囲の職場スタッフから受けた PWLE-R または NWLE-R の体験頻度を評定させた。評定期間

と評定値は (a) (b) と同様とした。
2. モデル 1, 2 の PA と NA (Positive, Negative Affect) は日本語版 PANAS (佐藤・安田, 2001) で測定した。各項目の評定期間と評定段階は「1」と同様にした。
3. モデル 3 のうつは日本語版 CES-D (島・鹿野・北村・浅井, 1985) で測定した。各項目を島他 (1985) に準じ 4 段階 (1: この 1 週間で全くないか、あったとしても 1 日も続かない~4: 週のうち 5 日以上) で評定させた。
4. CP は VanScotter & Motowidlo (1996) の 15 項目を筆者らが和訳して測定した。各項目は 4 回目の調査回で最近 1 ヶ月間の上司の CP を 4 段階 (1: 少しも当てはまらない~4: かなり当てはまる) で評定させた。

データの整理と分析方法 得られたデータは各調査回で変数ごとに合計し、得点化した。これらの得点とモデル 1, 2, 3 を用いて、マルチレベル構造方程式モデリングによる多母集団分析を行った。上記のモデリングではデータを対人援助職者個人の傾向の資料とみなす Within レベルと、個人間の平均的傾向の資料とみなす Between レベルで捉える。また、CP 得点で調査対象者を低群と高群に分け、各群に異なる母集団を想定して分析を実施した。

結果と考察

筆者らの研究成果から、まず Within レベルすなわち個々の対人援助職者において PWLE→PWLE-D→PWLE-R という社会的共有のプロセスが精神的健康保持に貢献することが示唆されていた。このことは CP 体験頻度の高低に関わらず認められる傾向にあるのが今回の分析結果より推察された。また、Between レベルすなわち対人援助職者間では PWLE-R→NWLE-R→NWLE という社会的共有プロセスの一端が精神的健康保持に貢献することも研究成果から予測されていた。これも先ほどと同じように CP の体験頻度の高低によらず認められることが分析結果より推察された。なお、これまでの成果では、モデル 2 で表される NWLE→NWLE-D→NWLE-R というプロセスが精神的健康保持に貢献する可能性は、モデル 3 の分析結果より支持されていなかった。しかし、今回の分析結果から、CP 低群、つまり対人援助の職務に従事しやすい職場環境が整わない状況では、Between レベルにおいて上記のプロセスが精神的健康を保持しうることが推察された。

この発表では以上の結果をもとに対人援助職者の精神的健康保持に寄与する方策について検討することも試みる。

本発表に関連し開示すべき利益相反関係にある企業などはない。また、この発表は JSPS 科研費 26380979 の助成を受けている。

(MORIMOTO Hiromichi, KURODA Yuko, INADA Masahumi, & OSADA, Hisao)